



第9回美術クラブ例会「絹谷幸二 平和へ」展

連休初日の4月26日(土)、第9回美術クラブ例会を、梅田スカイビル タワーウエスト27階の「絹谷幸二天空美術館」で行ないました。ナビゲーター役は、同美術館顧問の南城守さん。会員12名、一般1名の計13名が参加。三野会長の開会挨拶の後、南城さんから天空美術館の概要を案内いただき、美術館に入場。絹谷作品を立体的に演出した3D映像を見た後、各自展覧会を鑑賞しました。その後、22階の「梅田スカイビル会議室」で意見交換会を行ないました。参加メンバーからは、「3D映像で、龍に食べられるという貴重な体験をした」、「万博に来たような体験だった」、「パワーやエネルギーを感じる」などいろんな意見があり、南城さんからは、「大人から子どもまで理屈抜きに楽しめる美のテーマパークにしよう」とこの美術館を作った。絹谷氏はみんながニューヨークの現代美術に眼を向けていた時代に、イタリアの古典壁画の研鑽をし、模写に励んだ。アカデミズムも経験し基礎を知っているが、それを感じさせないところに絹谷作品の深さがある」と説明がありました。絹谷幸二作品は、これまであまり知りませんでしたが、今回じっくりと鑑賞する機会を与えていただき、貴重な体験ができました。いちばん印象的なのは、爆発するような色彩感覚で、それがザラザラしたような質感を伴って迫ってくるところです。とくに絵画から飛び出したような立体的な作品にその魅力があり、3D映像に作品化したのはすばらしいアイデアだったと思います。私のお気に入り、詩を感じさせる静謐な「日月天馬飛翔」、キッチュな「朝陽富嶽玉取り龍不二法門」、ピカソの「ゲルニカ」を思わせる「ニューヨークの天使」など。今回は南城さんの特別の計らいで全員招待していただきました。感謝。(杉谷健治)

うめきとも叫びともつかぬ文字の配された絵画、ビルに絡みつきながら飛翔する立体の竜、極め付きは3D映像から溢れ出す菩薩や宇宙空間…それら全てに圧倒されながら、いつしか平和や愛というテーマがズシリと心に響く。素朴にして巧み、大らかにして繊細、クラシックでありシュール…若い頃よりその才能を開花させ、西洋美術の古典も習得した絹谷幸二だからこそその魅力、いえ魔力を一言や二言で伝えることは適わないのかもしれない。しかし、彼の作品に触れれば、その魔力の虜になる人は少なくないでしょう。今進化し続けている大阪梅田、そのスカイビルの上階、まさしく天空で出会える現代アートの世界。まだ体験していない方は、是非!!(中辻純子)

絹谷さんの作品を見るのは初めてで、キッチュなオブジェは迫力満点でしたが、イタリアのフレスコ画の手法で描いた色鮮やかな絵の中でも、とりわけ《日月天馬飛翔》(図1)の空の「青」に魅了されました。この澄んだ「青」は、以前、パドヴァのスクロヴェーニ礼拝堂で見たジョットのフレスコ画の「青」を思い起こさせます。礼拝堂には、壁一面に「キリストの生涯」などが描かれていて、その一つ《ヨアキムの夢》(図2)の背景の「青」がまさに、ジョットに典型的な「青」です。天使が空から舞い降りてくる様子は、絹谷さんの絵の天馬が空に飛翔していくのと対照的な感じがしました。また、源氏と平氏の戦いを描いた《平治物語絵巻》(図3)における紅蓮の炎の「赤」は、ジョットの《最後の審判》における地獄(図4)の「赤」に重なる気がしました。絹谷さんは、西洋の技法を取り入れながら日本独自の文化を描き、西洋と東洋を融合した画家という印象を受けました。(村田京子)(右上から:図1、図2、図3、図4)

これまでフランスの近代絵画を鑑賞してきた「美術クラブ」は、今回初めて、日本の「現代絵画」、文字通りのコンテンポラリー(同時代)アートに親しむことになりました。私自身としては2度目の「天空美術館」体験でしたが、今回も、古代やルネサンスの壁画からピカソやデ・キリコ、さらには仏教美術、富士山からスカイビルそのものまで、すべてを食欲に飲み込み消化してしまう画家の強靱な胃袋が生み出した、宇宙的なエネルギーに満ちた絵画群に強い印象を受けました。昨年、京都の美術館で見た村上隆のアニメポップな世界とは異なり、もっと重量感がありながら、それでもやはり混沌に満ちてどこかポップでキッチュな世界は、まさに私たちの時代の絵画だと思われます。(三野博司)

